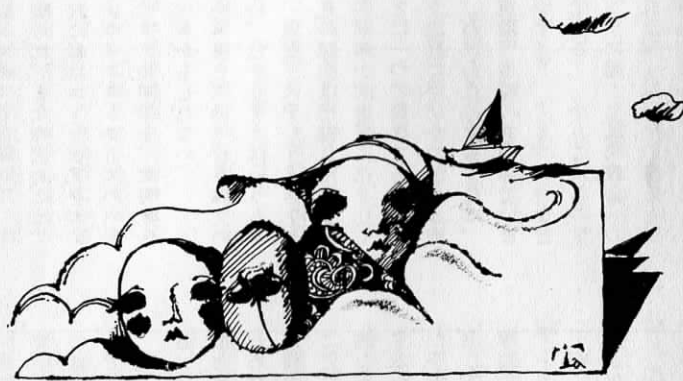


# 無可有郷から遊動郷へ

ユートピア

ユートピア

大沢正道



## アクチュアルな政治・社会批判

孫悟空は一とび十万八千里の馬力をもつ愛車筋斗雲を駆って、天の涯にそり立つ柱に「齊天大聖ここに來たる」と墨痕鮮やかに書きつけて駆けもどったが、あにはからんや、天の涯にそり立つ柱とみえたのは釈迦の右手の中指であった。「西遊記」にみえるこの話は、仏の力の無際限なことを語っているが、所詮、人間のなしうる業は悟空の域を越えるものではあるまい。

ユートピアは、実現の可能性を考慮の外において、想像力の及ぶかぎりの理想社会を描いてみせたものと普通いわれている。

ユートピアの現実性はまさにそれが実現不可能なところにある。モアアによって作られた「Utopia」なる文字は、否定を意味するギリシャ語の *ou* と、場所を表わす *topos* であるが、英語化すれば、さしずめ *no-place* あるいは *nowhere* となる。

けれども、プラトンの『共和国』を原型とするヨーロッパの代表的なユートピア文学を一読すればすぐ分かることだが、こんな国があったらいいなあ、という漫然たる想いを描いたものは一つもない。それらはみ

な、れつきとした政治文学ないし社会文学であり、時の政治、時の社会への痛烈な批判を、絵空事を装う物語の衣の下にしよばせている。体制にべつたりの未来学とはまったく逆である。

ユートピアがただのおめでたい空想、実現不可能な理想社会の物語ではなく、アクチュアルな政治批判、社会批判の一形式であったことは、ユートピアを問題にする際に忘れられぬポイントの一つだが、もう一つ、案外見過されていいるポイントがある。

## 理想も時代には勝てぬ

よく考えてみれば、しごく当り前で、コロンブスの卵みたいなことだが、ユートピアといえども、時代の枠組みが色濃くあぶりだされているのである。

この点を鋭く指摘したのは、マリイ・ルイズ・ベルネリ「ユートピアの思想史」(広河隆二他訳 大平出版社近刊)である。彼女の説によると、プラトンの『共和国』にはじまり、モアア『ユートピア』、カンパネラ『太陽の都』、ベーコン『ニュー・アトランティス』、カベール『イカリア航海記』等々、数多くのユートピア文学があるが、いずれもなんらかの形で国家を想定し、その下での共産制を描いている。想像力の及ぶかぎりの理想社会とはいっても、その多くは、彼らが生きていた時代環境を遠く抜け出すことができず、たとえば国家のない社会を思い描くほど奔放な想像力はみられない。ベルネリ女史にいわせると、国家のない社会をユートピアとして描いてみせたのはフランソワ・ラブレールくらいである。ラブレールが

モアアにつながるユートピア作家であることは、ラブレール自身、作品の上で立証している。「パンタグリユエル物語」の主人公パンタグリユエル王子の母は、モアア描くところのユートピア国王の娘なのだ。

しかし、ラブレールはモアアと違って、国家とか支配なしに営まれる理想郷を描いてみせた。「ガलगンチュア物語」に出てくる「テレームの僧院」がそれで、この僧院で守られなくてはならぬ規則はただ一つ「なんじの欲するところを行なえ」である。ラブレールの想像力は、権力の命令や指図なしに営まれる社会を描くところまで遠くをみることもできたのだ。

もつとも、そのラブレールにしても、やはり時代のとりこであることに変わりはない。ラブレールによると、この僧院で自由な生活を営むテレームはいずれも由緒正しい血統の生まれで、豊かな教養をもち、大勢の召使にかしづかれている。いま流にいえば、知的エリートといったところである。血筋という呪縛や主人と召使という社会習慣を突き破るほどにラブレールの想像力はふくらまなかった。

それだけではない。テレームの僧院はロアール河畔のテレームの森にあり、九百三十二の部屋を擁する地上五階、地下一階の、どんな宮殿にもひけをとらない壮麗な大建築である。中庭にはみごとな泉水があり、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語、フランス語、イタリア語、スペイン語の書物を収めた大図書館もある……といったあなばいだ。

自由な理想の生活は、このような壮大な物質的施設に囲まれた空間内に定着することで営まれる——この構想はどう考えても文明の構想そのものではあるまいか。

## 現代ユートピアの基点—ブッシュユマン

十六世紀にあっては、ラブレールの構想は、まだ新しかったかもしれない。しかし、文明の発展がその極に達し、文明そのものの質が問われている現代からみれば、それはもはやユートピアの名を返上しなくてはならぬ代物と化している。現代にふさわしいユートピアは、文字通り現代文明の枠組みを突き破ったはるか彼方を見通す眼で新しく描かれなくてはならぬ。

現代にふさわしいユートピアを描く眼の持主として、未来学者は不適合である。未来学者の眼はあまりこまかなコンピュータの数値ばかり読まされたので緑内障に犯されてしまい、文明の行き詰まりをみる事ができなくなっている。むしろ小松左京、安部公房のような作家の眼の方がたしかである。

安部公房の最近のエッセイ集「内なる辺境」(中央公論社)は、われわれを新しいユートピアの想念に誘い込む不思議な磁力をもっている。古いユートピアのように一定の空間を国境で囲い込んでしまっているのではなく、砂漠の遊牧民のように砂塵を上げて空間を横切っていく集団のうちに見出されるユートピア、一つの地点に根を下ろし、定着するのではなく、あちらこちらへと気の向くままに移動する漂泊の生活のうちに見出されるユートピア、現代の定着国家、定着文明の枠組みをはるかに越えた新しいユートピアのイメージが、この本のなかには内蔵されている。

けれども、この現代のユートピアのイメージは、中央アフリカ、

カラハリ砂漠に住むブッシュユマンの社会に、もつと鮮烈に描きだされている。ブッシュユマンについては田中二郎「ブッシュユマン」(思索社)を一読されることをおすすめするが、人類の過去をさぐる手がかりとしてブッシュユマン研究を位置づける多くの人類学者の問題意識は、ぼくにいわせれば逆立ちしている。そうではなくて、ブッシュユマンは人類の未来を示す手がかりなのである。

たとえばブッシュユマンの労働のしかたは文明人とまるで反対である。彼らにとつて、労働はまず楽しいものでなくてはならない。働きながら始終おしゃべりをし、働くのがいやになればさつとやめてしまふ。儲けは論外だが、労働の効率とか生産性なども二の次、三の次なのだ。

彼らはまた同じところに、早ければ一週間、いくら長くても数週間しかキャンプを張らない。七カ月間に十一カ所のキャンプを作り、約二百五十キロメートルの距離を移動した家族もいる。このような絶え間ないキャンプの移動と、その間に行なわれる家族間の離合集散、それは団地とオフィスの間をピストン輸送されているエコノミック・アニマルには想像もつかぬ人間的な暮らしぶりである。

かつてユートピアは、ない場所、つまり存在しない空間、無可有郷として読みとられた。しかし、地表のすべてが定着国家の占拠するところとなった二十世紀にあっては、ユートピアは、いる場所なし、つまり非定着の空間、遊動郷として読みかえられなくてはならぬのだ。デイスカパー・ジャパンをシンボルとする俗悪なレジャーとしての旅ではなくて、生活そのものを運ぶ旅が行き交う社会——ぼくの貧しい想像力はそこでへなへなとしぼんでしまふのだが、だれかその先を見せてくれる人はいないものだろうか……。